



季節を知ったら
暮らしが楽しくなった

〔第三五七号〕

霜降そうこう

十月二十三日

秋の夜長にハマグリ

秋の夜長、題名に惹かれて、平岩弓枝著『お伊勢まいり』（平成二十八年発行）を読みました。平岩さんの人気時代小説「新・御宿かわせみ」で、「御宿かわせみ」の人々が明治時代、大嵐で建物が甚大な被害を受け、しばらく休業することになり、お伊勢参りにでかけるというものでした。

作者の平岩弓枝さんは、東京の代々木八幡宮の一人娘として生まれ、ご夫君は同宮の宮司を務めておられます。伊勢神宮とも、第六十二回神宮式年遷宮の標語・シンボルマーク公募の審査員をされるなど、ゆかりのある方です。平岩さんがお伊勢参りをどのように書かれるのか、楽しみに読み進めました。東海道から伊勢路への道中が中心でしたので、残念ながら、伊勢そのものは描かれていませんが、熱田の宮から桑名への海路「七里の渡し」や桑名宿の様子は興味深いものでした。「七里の渡し」の海路で船酔いした一行が、桑名の宿場に到着して茶店でほっとくつろぐ場面などは、渡し船は随分と揺れて、旅人にとっては辛いものだったことが想像できました。そんな一行が喜んだのが、桑名の名物「焼ハマグリ」でした。考えてみると、かつてお伊勢参りは春が多かったため、ハマグリの旬と重なっていたのです。名物誕生にこの季節ありきでした。

ところで、先日、秋にもかかわらず、桑名でハマグリを食べました。この時期でも味わえたのは、天然ではなく、ハマグリを育てる畜養池のものということでしょう。ハマグリは、浜を九里（約三十六キロ）動くからこの名があるといえます。そのため、桑名の浜に稚貝を蒔いても海を動き回るの
で、「歩留まり」が悪いのだとか。そういえば、津の海で潮干狩りをしてい
ると時折、ハマグリが捕れることを思い出しました。あれも桑名のハマグリ
だったのだろうか、名物を肴に秋の夜長を楽しんだ次第です。

文 千種清美



おかげの里便り

おかげ横丁

○『伊勢の匠展～伝統の伊勢みやげ～』

伊勢路には歴史の中で生まれ、普段の暮らしに溶け込んだ伝統工芸品が数多く残っています。これらの伝統工芸品ができるまでの過程や職人さんの手仕事に注目して、作り手とその作品を紹介します。

と き／11月3日(水・祝)～11月14日(日) 10:00～17:00

場 所／伊勢路名産味の館2階「大黒ホール」

<出展予定>

伊勢根付(中川忠峰)、伊勢一刀彫(岸川行輝)、伊勢玩具(畑井商店)、伊勢春慶(伊勢春慶の会)、伊勢和紙(大豊和紙工業株式会社)、伊勢提灯(岩田提灯店)、伊勢型紙(株式会社大杉型紙工業)、伊勢木綿(白井織布株式会社)、伊勢擬革紙(擬革紙の会)、伊賀くみひも(くみひも平井)、伊賀焼(小島憲二、陽介)、市木もめん(向井ふとん店)、さるはじき(時計屋なかの)、木漆工(野嶋峰男)、神殿(株式会社宮忠)、鈴鹿墨(鈴鹿製墨協同組合)、竹笛(伊勢特産玩具製作所)、なすび団扇(合名会社賀来商店)、那智黒石(那智黒石協同組合)、四日市萬古焼(酔月陶苑)、和釘(久住商店)、他

お問い合わせ／おかげ横丁総合案内「おみやげや」電話0596-23-8838

五十鈴塾

○『桑名十万石の幕末』

木曾・揖斐・長良の木曾三川の河口部にあり、伊勢湾へつながる要地・桑名は中世より交易の中心として発展したところで「十楽の津」と呼ばれていました。

徳川の世になると家康の重臣本多忠勝が10万石で入り、城郭の増改築や大規模な町割りなどをおこない、桑名藩の基をつくりました。

後にその子忠政が2代藩主となり、大坂夏の陣で手柄を立て15万石に加増され、姫路へ移封されました。その後は松平家が代々の藩主となり、以来紆余曲折はあったものの松平姓の藩主が幕末まで治めています。幕末期の藩主は松平定敬、尾張藩主徳川慶勝や会津藩主松平容保などの弟にあたり、京都所司代に任命され、一橋慶喜や会津藩と協力して京都の治安維持に勤めました。

本年の大河ドラマにも登場しています。

ところが事態は急転し、ここから桑名藩の悲劇がはじまったのです。

その激変の大変さは涙なしでは語れないほどですが、杉本先生にわかりやすくお話しいただき、桑名藩の悔しさや無念を偲びましょう。

と き／10月26日(火) 13:30～15:00

講 師／杉本 竜(桑名市博物館館長)

参加費／一般 1,400円 会員 900円

場 所／五十鈴塾右王舎

講座についてのお問い合わせ・お申込み／電話0596-20-8251

※新型コロナウイルス感染拡大予防のため中止となる可能性があります。

五十鈴茶屋

○『節気菓子』

かしこじま ゆうば

賢島の夕映え

英虞湾が黄金色に染まる夕映えの賢島。半葉とそぼろ餡を交互に流して仕上げ、その一刻を菓子にとどめました。

やま にしき

山の錦

五十鈴川の上流に位置する神路山は、初秋の影を残しつつ、錦おりなす頃となりました。三色(みいろ)の餡の茶巾しぼりでその美しさを喻(たと)えました。

はつ しも

初 霜

朝晩の空気が冷たく感じられ、伊勢路にも霜の降り始める時季がめぐってきました。小豆餡のそぼろ生地で黒糖餡を包み蒸し上げ、初霜の降りた大地を表現しました。